随想 「大学入試と面接」

愛知淑徳大学 健康医療科学部 教授
愛知淑徳大学クリニック 院長　稲福 繁

本学に赴任する前は医科大学に勤めていたが、医学部入試では面接が行われる。この項は、これから受験する方への助言になるかもしれない。学長を務めていた前任校の医大での面接官としての経験を書こうと思う。面接では、なぜ医師・看護師を目指すのか、その抱負を訊くことが重視されていた。一生続けたい仕事として、あるいは将来の夢として医学を選んだ理由を訊く。多くの面接官が同様の質問をしていたと思う。長く教員をしていると、夢のない学生や勉学に熱意のない学生ほど扱いにくいものはない。何でも良いから夢を語ってほしい。そう言いつつも、振り返ってみると自分が若い頃不勉強だったことやズボラだったことを忘れてしまっていた。その過去を持ちながら、受験生には勉学に熱く取り組んでもらいたいとか、国際的視野に立ってもらいたいなどと要求していた。ズーズーシイにも程がある。以下は受験生の答えである。なぜ医師・看護師を目指すのかの質問に対して、多くの受験生がご家族の病気の経験を話していた。祖母が入院し、その時の医師や看護師の真剣な仕事ぶりを見て、医学を目指したいと語る方が多かった。今どきの高校生はホントに真面目に将来を考えているんだ、これで医学の未来は明るいと、感激したものである。ところが、程なく、この感激に冷や水をぶっかけられることになった。書店で何気なく立ち読みしていたら、医学部面接対策の本があった。この中に、面接対策の例文として家族の病気の話がいろいろな想定で書かれていた。ほとんどの受験生がそのマニュアル通りに話していたことに気がついた。がっかりした。しかし、全てがマニュアルだけではないと信じたい。あの陛下の手術をした天野教授は三浪もして医学部に入学している。高校の頃から心臓外科医を目指していたと云う。そういう方もいるので、受験生の話をすべて否定する訳にはいかない。受験生には、赤面しても、おどおどしても良い。素直な、誠実な自分を見せて、夢を語って欲しい。